

別するためには、欲求が満たされないことと必要が満たされないことは違う状況であると考えなくてはならないはずで、こうした問いから出発して以下のようないくつかのことを同時並行でやっています。

① 必要を理論的に取り上げた数少ない現代の経済学者である、アマルティア・センの議論の肩に乗っかるような形で議論や博論を書きました。彼の問題関心の広範さに導かれるように、平等論やポスト・コロナリズム、あるいはフェミニスト経済学といった、通常、経済学ではマイナーな領域に足を突っ込んでいます。また日本においては経済学のみならず、哲学など他の領域でも必要をめぐる議論はほとんどなされてこなかったようです。そんなこともあって無謀にも学問の境界を越境することが多くなっています。例えば「必要を決めるのは誰か」というような問いは、一人経済学だけで答えがだせる問題ではなく、哲学や政治学、カルチュラル・スタディーズなど様々な領域と関わってきます。

② 昨秋まで2年ほどケンブリッジ大の研究員として、必要が経済学や思想の歴史のなかでどのように取り扱われてき

たかについて研究する機会に恵まれました。「経済学の父」アダム・スミスは、貧しい人々の必要が満たされる限りにおいて、市場社会は正当化されうると考えました。私はこれを「アダム・スミスの但し書き」と呼びたいと思っていますが、この但し書きは今では忘却されてしまったようです。いつ経済学の歴史から必要が消えてしまったのか。ミステリーさながらに、なかなかスリリングです。

③ 必要を満たす制度・政策にかかわる「社会政策」が学部での私のメインの担当科目です。また前任校では社会福祉学科で教員をしておりました。この領域での研究としては、ベーシック・インカム（基本所得）という、福祉国家の現在のあり方とは一見大きく違う考え方を中心に研究しています。現在の仕組みが「働かざる者食うべからず」（正確に言うとお金持ちは働かなくても食べれますから「働かざる貧乏人は食うべからず」ですが）という金言で説明されるとすれば、ベーシック・インカムは「衣食足りて礼節を知る」という金言に訴えかけます。市民として生活を営み責任を果たしていく出発点として、まずは食べれることを保証しようという発想です。つまり誰で

も生活に必要な最低限のおカネは無条件で給付されるようにしようという仕組みです。じつは福祉という発想がでてきたり、経済学という学問がでてきたりするのと同じだけの歴史をこの考え方も持っています。18世紀の終わりごろからです。有名な人物ではフランス革命やアメリカ独立戦争にかかわったイギリス人のトマス・ペインがいます。20世紀を代表する詩人もこの考え方に共鳴しました。数十年前には世界の各地で運動のなかで要求されていました。他方で「ネオリベリズム」という言葉を作った（市場にすべてを任せばよいという考え方の教祖と目されたりもする）経済学者も類似的な主張をしていたりして、なかなか面白いのです。

4月に着任したばかりです。ゼミや大学院の授業などでは「ネットカフェ難民」や最低賃金の問題などを扱ったりしていますが、学部の講義は私の担当は秋学期に集中していますので、これからです。そのため教育というより研究に偏った文章になってしまいました。これからよろしくお願ひ申し上げます。

（やまもり とおる）



アダム・スミスの但し書と「衣食足りて…」

山森 亮

(大学経済学部准教授)

唐突ですが、あなたは今何が欲しいでしょうか？ そして何が要りますか？ 物ではなくて事柄でも構いません。たとえば私の場合、今したいことは研究室をでて、約束通り友人と夕ご飯を食べること、逆に必要なことは、友人の携帯にキヤンセルの連絡を入れ、研究室に残ってこの文章を書き上げることです。締め切り間際にとりかかる私が悪いのですが、このように欲求と必要は（同じこともありますが）、違うことがしばしばです。ところが現代の経済学では常に必要と欲求が同じであると仮定されています。あるいは欲求だけがあつて、必要という概念の入る余地はありません。このことどこが問題なのかを説明するために、少し個人的な昔話をさせて下さい。

大学受験に失敗した頃、路上での生活を余儀なくされていた人たちと出会いました。それで経済学を志したのですが、いざ大学に入って教科書を開いたときの違和感を今でも覚えています。「選好」「欲求」に基づく「選択」の話はあつても、貧困ゆえに「選択」することもできず「必要」が満たされないという世界はほとんど出てこないではないか、と失望し授業に関心を持てない日々を過ごしま

した。アルバイトのかたわら、日雇労働者や野宿労働者たちの運動にほんの一時期ですが関わるようになります。私自身は同志社で学んでおりませんが、こうした活動のなかで同志社の学生や卒業生、中退された方々などとお会いしました。そのころ彼らと議論し合った疑問や、胸の内に抱えた思いが、私の研究の原点です。その意味で同志社という社会的場の存在に私も良い影響を受けたといつてよいでしょう。なぜ一生懸命働いている人たちが世間からは受けものと思なされてしまうのか。なぜ困窮している人たちをソーシャルワーカーは追い返してしまうのか。なぜ多くの人が路上で冷たくなつて人生を終えているのにニュースにもならないのか。どうしてそうした辛い出来事のあとに（自分の大学の）教室に戻ると「日本に貧困はない」とかいいう教授のご宣託を聞かなくてはならないのか。いたい自分には何ができるのか。

欲求と必要を区別しないのであれば、食べるものがなく明日も生きることすらあきらめなくてはならない状況も、高いフランス料理を予算の都合であきらめるという状況も、理論的にはまったく一緒になつてしまします。この二つの状況を区

食物アレルギー児のQOLの向上を目指して

伊藤 節子

(女子大学生生活科学部教授)



自己紹介

小児科医として、救急を含めた小児科一般診療のみならず、専門医としてアレルギー性疾患、とくに食物アレルギー児の診療に長年携わってきた。食物アレルギー児により食事は生活習慣病の予防にもつながる食事でもあることを実感したことが管理栄養士の教育に携わることが志望した最大の動機である。勤務していた病院で生き生きと仕事をしている多くのすばらしい管理栄養士に巡り会ったことも大きな志望動機となった。

母親になる可能性が高く、しかも食教育を担う管理栄養士を目指す女子大生の教育に携わること、同時に医学部ではメインテーマとはなりにくい食品側に目を向け、食物アレルギー児の食生活の質の向上に役立つ研究を行うことを目的に2000年4月より本学に勤務している。

食物アレルギーにおける管理栄養士の関わり

ガイドラインとしての性格を有する「食物アレルギーによるアナフィラキシー学校対応マニュアル」、「食物アレルギー診療ガイドライン2005」、「食物アレルギーハンドブック」(以上、日本小

児アレルギー学会食物アレルギー委員会、「食物アレルギーの診療の手引き2005」(厚生労働科学研究班検討委員会)などが相次いで公表され、私も作成に関わってきた。

このようなガイドラインが公表されたことを受けて、昨年より食物アレルギー児に対する栄養指導を行った場合の指導料を診療報酬として請求できるようになり、管理栄養士の活躍の場が増えることになったのは喜ばしいことである。

独立行政法人環境再生保全機構より依頼を受けて、数人の専門医とともにガイドラインよりも詳しいものとして作成した「知っておきたい食物アレルギー基礎知識」もまもなく刊行される予定である。

食物アレルギーとは

食物アレルギーとは、食物を摂取することにより免疫学的機序を介して引き起こされる生体に不利な反応と定義される。免疫学的機序からはIgE抗体の関与する反応とIgG抗体の関与しない反応に、摂取後症状出現までの時間からは即時型反応と非即時型反応とに分類でき、この両者を組み合わせて考えると食物アレルギーの病態が理解しやすくなる。

食物アレルギーによる症状

食物アレルギーによる症状で多いのは乳児期に発症する食物アレルギーの関与するアトピー性皮膚炎であり、全体の90%以上を占める。多くの場合、母乳中の微量の食物抗原によりアレルギーが成立し、母乳摂取あるいは直接摂取により症状が発現する。

臨床上とくに重要なのは即時型反応であり、加工食品に含まれる表示義務濃度以下の微量の抗原によってもアナフィラキシー反応をおこす事があるため、給食などにおいて注意が必要である。

特殊な型としては、特定の食物を摂取後2時間以内に激しい運動をした時にのみ症状が出現する食物依存性運動誘発アナフィラキシーがあり、中学・高校生にみられることがある。原因として小麦や海老等が報告されているが、その食品を摂取しただけでは、また、運動のみでは症状が誘発されないのが特徴であり、診断が難しい疾患である。

食物アレルギーの治療

食物アレルギーの治療の基本は、他のアレルギーと同様、原因抗原の回避であり、アレルギー除去食が最も合理的かつ

有効な治療である。食物アレルギーが他のアレルギーと最も大きく異なる点は、食物は、抗原性をもったまま吸収されて初めてアレルギーとして働くため、消化・吸収という児の発育に伴い成熟するプロセスが症状発現に関与すること、アレルギー除去食の目的が、アレルギー回避を続けることではなく、早期の寛解誘導を図り、症状をおこさずに「食べる」ことであるという点である。

「食べる」ことを目指した食事指導

食物アレルギーの症状には、ごく軽微な皮膚症状からアナフィラキシーショックに至るまであるが、その症状の差を生体の感作の状態(抗体量)と摂取される抗原量という観点から捉えて解析することにより、「食べる」ことを目指した食事指導のあり方を検討するのが現在の研究課題である。

調理による食品の低アレルギー化

自家製の抗体を用いて確立した抗原定量系と特定原材料測定のために開発されたキットを用いて、調理した食品中の抗原量の定量を行っている。

乳幼児の食物アレルギーの原因としては、乳児期に発症の食物アレルギーの関

与するアトピー性皮膚炎においても、重篤な即時型反応においても、卵が最も多く、牛乳、小麦がそれに続く。

加熱により変性を受けやすい卵については、調理条件を工夫することにより、過敏性の高い卵アレルギー児でも摂取可能なレシピを作成することが可能となった。牛乳、小麦については調理による低アレルギー化は卵に比べるとわずかで

成果の臨床応用

これらのデータを元に、臨床の場において少量のアレルギーを含む食品から摂取して耐性を獲得させる経口免疫寛容の誘導を試みており成果をおさめている。

食物アレルギー児のための献立作成

食物アレルギー児の食事指導においてはアレルギー除去という観点のみならず、乳幼児に必要な栄養バランスとQOLの向上に対する配慮が必要であり、臨床栄養学ゼミの総力を挙げて取り組んでおり、いずれ成果を刊行することが夢である。

(いとう せつこ)



グループワークの結果
(班ごとの「京都像」について)

作品のフィードバックと相互評価

授業を組み立てる上で大事にしている点がフィードバックによる改善である。必修授業では、作品を授業で発表し、手直しする時間を取ることは時間数の関係で難しい。そこで総合研究では、1講座25人程度の少人数クラスの特徴を生かし、評価のフィードバックを行っている。

課題を出した場合「とりあえず作ってみる→ふりかえる→手直しをする」というプロセスを繰り返すようにしている。

特に印刷物や出版物については、著作権・肖像権などの権利の問題や、配色・レイアウトなどのデザインの工夫が必要になるなど、学ぶべき事例がたくさんある。まずは作品に取り組み、後で手直しをするこ

とで、自ら権利の問題やデザインの工夫の必要性に気づかせるようにした。

さらにデザインについては、個人の感性

によって様々な評価がある。自己評価だけでなく、他人からどのように見られているのかを知るために、相互評価を行った。学内のイントラネットを利用し、匿名性を保ちつつ、即座に集計結果が生徒にフィードバックできるような仕組みを用意した。なお、評価結果は学期の成績にも組み入れた。

「百聞は一見に如かず」

もう一つのポイントは、サンプルではなく、実際にものを見たり触れたりできるように心がけている点である。

印刷技術や光の特性を扱う時は、理科から回折格子をもらい、「空き缶分光器」を製作して光のスペクトルを見たり、顕微鏡で携帯の液晶画面を観察した。色彩については、様々な教科のテキストを参考にしながら、心理的・文法的な色彩感情について具体例を示した。デザイン・配色の部分では色覚特性も踏まえて、見やすい配色やユニバーサルデザインについて話をした。

自ら気づくことのできる授業

机上の空論ではなく、実際に自分がつくりあげた作品を題材に授業をすると、理解も早い。また、何度もフィードバックを行うことにより作品は見違えるように変わっていく。一からすべて解説しなくとも、生徒自身あるいは生徒同士で答えを導き出せることがわかった。

時数	授業内容
1	ガイダンス
2~3	図書利用指導(辞書・事典とは何か?)
4~5	DTP実習(PowerPoint)
6~8	グループワーク(京都について)
9	DTP実習(Photoshop)
10	相互評価(中間評価)
11	分光器製作実習
12~14	光と色(物理的な色・心理的な色)
15~16	デザインと印刷技術
17	DTP実習(ベジェ曲線)
18	出版の歴史
19	相互評価(期末評価)

授業内容一覧表

「総合研究」って何してるの? ~教科の枠を越えて~



足立 朋子
(高等学校司書教諭)



鈴木 潤
(高等学校情報科教諭)

総合研究とは

本校では、総合的な学習の時間に充当する3年生の選択科目として「総合研究」を開講している。他の講座とは「教科横断的な内容を扱う」以外にも「1講座を2人の教員が担当する」「毎年テーマが変わる」といった異なる特徴を持つ。

昨年度は、数学科と情報科の2名で「モデル化とシミュレーション」をテーマに、「C#」言語を用いたゲーム作成に取り組んだ。今年度は「知的探求と情報リテラシー」をテーマに、身近な「京都」を題材として、観光ガイドの作成などを目標に授業を進めている。

メディアセンター「知創館」

総合研究は主に「知創館」での授業となる。「知創館」は3万7千冊にのぼる図書資料、新聞・雑誌などの従来の図書館機能に加え、生徒が使うに十分な数・スペックのPC、館内で自由に使えるインターネット、データベースなどを備えた総合的な施設である。常駐の教員のほか、司書教諭を含めたスタッフ4名が利用サポートを行っている。館内には「演場」としてのプレゼンテーションステージ、グループ学習に適した教室、情報教室もある。また、担当者2人が館内に席を持つため、授業に関する質問や相談にすぐに応じることができる。

授業の目指すところ

「京都」についての研究を1年間のテーマに据えたが、その前段階、プロトタイプとして、1学期はより身近な「同志社高校」について調査研究を行い、「同志社高校事典」の作成を目標とした。中高統合を目前に控え、今までの「同志社高校」で3年間を過ごす最後の学年となるということも大きな理由である。

2講座44名が五十音を一字ずつ担当し、提出条件を次のように設定した。

- ・同志社高校にまつわる項目を最低3つ入れること。
- ・B4の用紙1枚に収めること。
- (印刷を考慮に入れる)

担当文字を決める際は、「ぬ」や「る」のくじを引いた生徒からは悲鳴が上がることもあったが、皆それぞれ知恵を絞り、作品に取り組んでいた。

1学期の授業の中で、「京都」に関するブレインストーミングなどのグループワークを行い、生徒の中の「京都」像を明らかにした。これは2学期への準備の意図もあるが、受講した生徒たちの「京都」について取り組みたいという熱意が予想以上に強かったことを受けている。活発な意見交換がなされ充実した時間となった。

課題を出すと、生徒と教員とのやりとりが中心となりがちである。しかし、教員の評価と生徒の中での評価にずれが生じることもある。

様々なツールが発達し情報が氾濫する中で、いかに情報を収集・整理し、ニーズに応じた情報の提供ができるかが課題となっている。自己満足で終わるのではなく、他者の評価を受け入れ、自らの課題に気づくことができる授業にしたい。

専門外の範囲にも触れることが多く、他教科の先生方に様々な助言をいただき、本当の意味での「総合的な」学習の時間になったのではないかと考えている。今後も生徒の意欲に負けない学際的なアプローチを深めていきたい。

(あだち ともこ・すずき じゅん)

中国における中高生の 歴史認識について

西村 克仁

(香里中学校・高等学校社会科教諭)



2006年4月から1年間、本校の長期海外研修として北京において中国の歴史教育の現状について調査する機会を得た。日中間において歴史問題が難しい政治課題であることは今更言うまでもない。

いつの頃からか、私は歴史の教師として日中間で教室で話されている内容がどのように異なるのかについて興味を持つようになった。

しかし、日本で知ることができるのは教科書の日本語訳程度で、実際授業をしている現場の教師や、中高生の意見を知る術はほとんどなかった。今回、多くの方々の協力を得て長期研修の実現となった。

北京に到着してから数ヶ月、私は授業見学を許可してもらえ学校を探し続けた。外国人見学者のために用意されたお仕着せの見学コースではなく、中国の歴史教育の生の姿が見たかったからだ。

幸運にも、私が住んでいた付近の中高併設学校の校長先生から連絡をいただいた。先生は「日本の歴史の教師が、授業見学をすることは大変意義のあることで

ある。」と快く引き受けてくださった。当初2ヶ月間であった見学期間は、先方のご好意により延長され、最終的に私が帰国する直前まで半年間にも及んだ。その間、私は中3から高3に至るまでのあらゆる歴史に関する授業を見学することができた。

中国の歴史教育は近現代史は言うまでもなく、古代史においても政治的影響が強い。自国史は現代の中華人民共和国を構成する「中華民族」の歴史として教えられ、古代においては多民族がどのような「中華民族」に統合され、近現代においては「中華民族」がどのような民族的苦難を乗り越えて復興をなしとげようとしているのか教えられる。

教科書においてはこれらに貢献した歴史上の人物については「民族的英雄」や「愛国者」という形容がなされる。また、中国政府が民族的悲願として掲げている台湾問題については、台湾が古代から中国の一部であった根拠が教科書だけでなく大学入試問題にも頻繁に出題される。

高3の授業では入試問題を使用しての演習がおこなわれており、見学を通じて

中国の大学入試問題の出題傾向を知ることができ、非常に興味深かった。

授業が日本と関連する部分にさしかかると担当教師は私をしばしば指名し、日本ではどのように教えているのか説明を求めた。

中国の生徒たちは、日本に比べて授業内容に関して積極的に発言をする。日中間で認識の異なる点に関して、彼らは容赦なく質問を浴びせかけた。私の拙い中国語では彼らを納得させることはできなかったが、歴史認識の違いを肌で感じた。

この学校ですこした半年間、同業者である教師たちとも親交を深めることができた。私の接した教師たちは声高に「愛国」や「反日」を叫ぶわけでもなく、とても紳士的に接してくれた。

また、日本に対する印象や歴史問題について、生徒に聞き取り調査をすることも許された。その数は中高生100名にも及んだ。日本において中国の若者の声が紹介される場合、それは概ね大学生などの意見であることが多く、中学生・高校生の意見が伝えられることは少ない。これだけまとまった数の中国の中高生の意見

を調査することができたのは貴重なことではないかと思う。

高校生ともなると、日中間に対する関心はかなり高い。返ってきたアンケート用紙にはどれもこれも彼ら彼女らの日本に対する考えがびつしりと書き込まれていた。

靖国参拝を繰り返した小泉前首相に対しては「いい印象は全く持っていない。」とした生徒が大多数であり、中には「A級戦犯の広田弘毅は日本ではどのように教えられているのか？」などと質問してきた生徒もいた。

歴史問題を日本で生徒に考えさせる場合、「興味が無い」ことも含めて多種多様な意見が出る。これに対して、中国の中高生の意見は多様性という点では乏しく、その認識は政府とはほぼ一致していることがその特徴といえる。

たとえば、生徒たちの多くが一般の日本人と歴史を歪曲しようとする「右翼分子」を区別して論じており、「一般の日本国民がまちがった方向に扇動されないか心配だ。」と述べている。これは中国政府の見解そのものである。ただ具体的

に誰を「右翼分子」と呼ぶのかについて、具体的に答えた生徒はいなかった。

生徒たちは私のことを「西村老師（シーツン ラオシ）」と呼び、歴史問題意外にもよく話をした。中国の高校生たちにとつて大学受験がいかに熾烈かということや、自由な日本の高校生が羨ましいことなど、多くのことを語ってくれた。

日本のマンガ・アニメ・ゲームは想像以上に中国の中高生の日常に溶け込んでいる。なかでも宮崎駿の作品や『名探偵コナン』が人気であった。また、ゲームを通じて日本の戦国時代に興味を持ち、徳川家康が好きだという男子生徒もいた。

日本語訳を終えた彼ら彼女らのアンケートはこの秋には本校高校3年生の「日本史」の授業で使用する予定である。これを通じて日中間にある歴史問題を考えさせようと思っている。自分たちと同世代の意見に対して、本校の生徒がどのような反応をするのか今から楽しみである。

(にしむら かつひと)